

パイオニア精神の継承と新時代の登山

●未踏峰だらけの東チベットへ

今、大学山岳部では部員数の減少に歯止めがかからず休部状態の学校も散見される。幸い神戸大学山岳部には数名の部員が在籍しているが衰退傾向に変わりはない。卒業生中心の神戸大学山岳会にとっても将来に対する大きな問題である。

「初登頂の時代は終わったパイオニアワークはなくなった」「チベット周辺の未踏峰も8000m峰がなくなったあとの落穂拾いにすぎない」「スーパークライマーが極限登山でバリエーションルートを登るのが新しい方向」「ボルダリングや沢登りなど、特化した分野で仲間を募って登ればいい」など、登山は多様化し、さまざまな考え方があつた昨今だ。大学山岳部が明確なミッションを持って活動する時代ではなくなったようにも見られる。

しかし、私はそうは思わない。より緻密に世界の山に目を向けていけば、新しい切り口でのパイオニアワークが可能であることがわかる。ヒマラヤの東、我々神戸大学が先鞭をつけた四川省のチェルー山地域や2003年に試登したルオニイ峰のある崗日嘎布山群(カンリガルポKangri Garpo)は、今日まで政治的制約からごく限られた地域のみが明らかにされただけだ。山の研究を進めてみると、崗日嘎布山群には6000m峰が約47座存在しているが、まだ一つのピークも登頂されていない。知られざるピークが続々と発見される可能性をもっているのではないか。また、それに登山隊の規模、期間そしてかかる費用も従来とは比較にならない小型コンパクトな遠征が実行できそうだ。

登山の魅力はなんといつても対象の山を見つけ、ルートを発見し、困難を克服して登頂することにある。若手に未知なる山を登る感動と体験を受け継ぐ場として、また新時代の扉を開ける鍵を見つける機会となろう。新しい疑問と課題を設定して探求する精神は、学問の道と同様、登山の本質としてゆるぎないものなのである。

われらは、活動方針に「パイオニア精神の継承」と「新時代の登山のありかたの模索」を掲げ、2003年に敗退した「ルオニイ峰6900m(若尼峰、Ruoni:注-2)を含む阿扎氷河(Ata Glacier)の高峰への再挑戦」を目標に置いた。そして2007年秋、再度偵察隊を派遣し、従来知られていなかった6726m峰(仮称KG-03峰)、6350m峰(仮称KG-05峰)などの山座同定を成果とすることが出来た。

ここでは、登山をめぐる状況を振り返り、新時代の登山のあり方を探ってみた。

●社会の変遷と登山スタイルの変化

まず、昨今の日本の登山界に目を向けてみよう。日本アルプスの人気地域や日本百名山、最近では日本三百名山なども賑わいを見せている。山はファッション性豊かな服装、装備の登山者であふれている。山小屋は立派なホテルのように整備され、縦走は軽装備で手軽に出来るようになった。登山が他のスポーツと同様にビジネスの対象となり、機能性に優れた新商品が続々と登場している。そして用具や服装を楽しむことに喜びを見出す傾向も強い。

2007年8月、中国地質大学と黒部源流で合宿した。太郎平から薬師沢出合までの登山道は半分以上が木道化していた。薬師沢の小屋は釣人と赤木沢を遡行するパーティの登山基地になっていた。若き学生の頃に訪れた40年前に比べると黒部源流も深山幽谷とは言い難い。早朝、ヘルメットとハーネスに身を固めカラビナをジャラジャラ鳴らしながら

小屋から出発するクライマー達に違和感を持ったのは私だけだろうか。我ら昔ながらに足元は地下足袋に草鞋姿であった。ただ、一步源流域に入ると太古から変わらぬ大自然に包まれていたことには心が慰められた。

少子高齢化の傾向に拍車を掛けるように登山の人口構成に変移が見られる。中高年の登山者、特に女性の増加が顕著である。若い頃に登山を経験した人達が再開した層も多いと思われるが、中高年になって登山を始めた人々も多いようだ。若い世代が極端に少ないのが気になる。日本の山も確かに変わった。

●ウィルダネス(Wilderness)に注目

文明の進展と登山の歴史を振り返ってみよう。黒部溪谷の電源開発、奥美濃の徳山ダム、氷ノ山瀨川山スーパー林道、など、日本は列島の隅から隅まで開発して生活に利用しようとする傾向が強い。しかし、近年生活が豊かになるに連れて自然保護の機運も高まり開発にブレーキが掛かりだしている。世界遺産として自然を残そうとするのもそのような社会の機運であろう。

米国では早くから開発が自然破壊を引き起こし、壊滅的なダメージを各地に残した。後にその反省から極端な自然保護の運動が巻き起こっている。クリーン登山などもその一つである。レニア山に登るにはヒューマン・ウェイスト(Human Waste:尿尿)を持ち帰る準備をしてかからねばならない。国立公園(National Park)は沢山の人々が訪れるので規制も厳しい。イエローストーン国立公園内のキャンプ場でのこと、側の清流水で米を研ぎ、研ぎ汁を草の根元に捨てたら注意された。反面、遊歩道は整備され案内板や休憩所もたっぷり設けられている。人工と自然を合体させたのが国立公園だと私は解釈している。

これに対してウィルダネス(Wilderness)がある。こちらは指定したエリア全体を自然のままに放置する考えだ。域内には道路も作らない。登山道は指定地に入ったところで無くなる。道標も設置しないし、ガレ場にペンキで印をつけるようなこともしない。三角点や標識がある日本の山に親しんでいるので何も無い山頂は少し寂しい気もしたが、自然のままという考えが徹底している。機械化車両(Mechanized Vehicle、バギー車、スノーモービルなど)の進入も禁止だ。但し、域内生活には納得できるルールがある。キャンプサイトはないが、水流から一定距離離れてテントを設営しなさいとか、ヒューマン・ウェイストは10cmぐらい掘って埋めよ、など細かく生活のルールを決めて入山を受け入れている。キャンプ場がウィルダネスの境界線に多数あり、そこでは盛大なキャンプ・ファイヤーも出来る。駐車場やトイレも完備している。アラスカやロッキー山脈にはこうしたウィルダネスが広範囲にありまったくの自然が楽しめるのだ。ウインドリバー山群(Windriver Range, Wyoming州)の4000m峰群はウィルダネスにあり、アプローチも長く2、3日必要だ。主稜線には岩と氷のピークが多数存在している。アプローチの簡単なヨセミテやシエラネバタのロッククライミングとは違い、オールラウンドな登山家を育てる環境に優れている。

中国では2006年、チベット鉄道開通でラサを中心に急速に観光地化が進みだした。自然破壊と反省の歴史を持つ米国や日本を反面教師とし、結界を設けて国立公園化するものとウィルダネスとして残すものを明確にしてほしいものだ。そして、チベット文化の温存にも力を注いでほしい。強制移住など「解放」と称して現代中国の価値観を一方的に

押し付けても決して成功しないことに早く気づいてほしい。広大なチベットの遠征登山時代がすぐに終わるとは考えられないが、ウィルダナーネスとして残されれば私たちの継承すべき登山が末永く続けられる。

北部パタゴニアでは最高峰のアレナレス峰以外に周辺にはまだまだ魅力ある未踏峰が多くある。この地域は意図的ではないがアプローチの難しい自然環境がウィルダナーネスを残している。日本でも手を加えない自然を取り戻す考えでウィルダナーネス復活が出来ると思う。

●国の発展と登山の盛衰

登山が発展する過程と衰退する過程に着目してみよう。国に活力があるときはスポーツが発達する。登山もそのような傾向にあると思う。昨今の韓国や中国の登山熱を見るとその傾向が顕著である。マスコミが注目し、ヒーローが生まれる。功名心をモチベーションに多くのヒマラヤ登山が実行されている。賛否両論あろうが、北京オリンピックの聖火はチョモランマの頂上に持ち上げられた。中国では8000m峰を中心に有名な高峰の頂上に立つのが多くの登山家の目標となっている。登頂者にはオリンピックのメダル獲得相当のスポーツ関連での就職と待遇に優遇制度があるそうだ。2007年はチベットで組織された中国の登山隊の3人が14年の歳月をかけて世界の8000m峰14座すべてに登頂した。ちなみに14座の制覇者は世界にこれまで13名いる。それに対して私たちが注目している6000m峰にはまだ中国の登山界は見向きもしないのが実情だ。

日本の登山界はそのようなブームの去った後の退廃期にあるのではなかろうか。パイオニアワークだとか、処女峰への挑戦と言った価値観はマスコミ受けしなくなった。ましてやそれを旗印に資金調達することも困難だ。安心と安全をよしとする社会風潮は登山とは遠い対極にある。ごく限られた人たちが登山に人生のすべてをかけて極限登山を試みている。最近話題になった山野井夫妻のギャチュンカン北壁の登攀(「凍」 沢木耕太郎著:新潮社 参照)はその究極にある。精鋭クライマー達は比較的アプローチの簡単な鋭峰やバリエーションルートまたは冬季登攀などより困難を目指している。

●個人主義社会と登山観

中国地質大学との黒部合宿のことである。合同登山を実施するにあたり文化や思想、生活、登山方法などの違いを理解し、コミュニケーションを円滑化する目的があった。ところが、もうひとつ世代間ギャップという潜在課題も見えた。

まず、行動食は各自が自分の嗜好に合わせて勝手に持参するのが今流である。それとは知らないシニア組のY君と私は非常食で食いつなぐことになった。つぎに登攀道具である。ハーネスが個人装備ということは理解できる。しかし、カラビナ、ハーケン、シュリングも各自が個人装備として持参するという考え方は私にはなかった。私たちの時代は大抵の物は共同装備としていた。

赤木沢に入ると滝の両岸に取り付く者やジャブジャブと水中をたどる者などルートファインディングも各個バラバラだ。比較的簡単な沢だったから放置しておいた。私たちの時代なら怖い先輩に徹底的に注意されたであろう。トップの責務はパーティの実力にあった。ルートを探して後続に気配りしながら進む。団塊の世代の私を残してどんどん先に進んでいくのはちょっと感心しないと思った。スキー滑降のときに顕著に現れるリスクである

が、パーティがバラバラになって歩くと何かあった時の対応が遅れて思わぬ結果に陥ることがある。「リスキーな登山だね」と一言感想を述べさせてもらった。パーティを組んで山に行くのはなぜか、という問いを改めて思う経験であった。

個人主義的登山スタイルは私たちの時代にも社会人山岳会に顕著に見られた。「山行は自己の目的を満たすために相手を活用する」、という理由でパーティを組むのだと、社会人山岳会に所属し、屏風岩の東壁スラブの初登攀をしたN君が言っていた。何度かいっしょに岩登りに行ったが、ひとりで登れるような所ではザイルを結ぼうとしなかった。彼らの世界では相手を一人前のクライマーとして尊重しあうというのがマナーであったようだ。ところが我々山岳部の学生は駆け出しの登山家として扱われていた。集団主義的な側面も強かった。立派な登山家(Mountaineer)になることを理想とし、やがてはヒマラヤ遠征に参加できるような技量を身につけたいと多くの部員が思っていた時代でもあった。登山スタイルが多様化した現在、大学山岳部の部員も様々な考え方を持っている。一律に扱うことはできないが、多様性を全て受け入れるには部員数が少なすぎる。中国では一人っ子政策の結果、学生たちの気質が“わがまま”と表現したいようなものになっている。これも合同登山を考える上で大きな問題になってきた。

本筋がオールラウンドなマウテニア志向とするならば、在学4年間で一人前の登山家になることは無理だ。卒業後も登山を続けて海外遠征にも参加し経験を積んでいかねばならない。個人主義の時代であってもチーム・プレーのできるすばらしい登山家として、また社会人として優秀な人材が育つことが大学山岳部・山岳会のミッションである。

●次世代を育てる

神戸大学の場合は現在数名の現役部員が存在するが、年齢構成を見ると高学年や大学院生などに偏っている。また、学生時代に思い切り山に登って、就職したら仕事一筋と覚悟している者、遠征などヘビーな登山はしたくない者など、多種多様な取り組み姿勢を持っている。そこで課題は新入生部員の獲得と海外登山への勧誘である。それには魅力あるビジョンが必要だ。学問が切り口を変えて発展するように、新時代に相応しい「未知への挑戦」「パイオニア精神の発揮」の場を提供しなければならない。当面の目標として岡日嘎布山群遠征を掲げたが、遠征隊員数を補うために他校からの参加を促すことも必要だと考えている。

米国に数年在住して解ったことであるが、スポーツは国を挙げて大切にしている。また、幼少時代からスポーツに親しめる社会インフラの充実はうらやましい限りだ。さらに感心したのは、「子供は将来のお客様」として徹底的に誘い込む社会全体の仕組みである。ゴルフクラブでは奥さんも正会員としてプレーできるのはなるほどアメリカだと納得だが、24歳以下の子供も会員として若干の制約はあるもののタダでプレーできるのはサプライズであった。なぜかの問いにユーモアを交えて先ほどの答えが返ってきた。登山の場合、アメリカ山岳会に所属すると年会費に遭難救助費用が含まれている。カナダでは国立公園の入園料にレスキュー費用が含まれている。

日本の登山界では高齢化を嘆きはするが、若年層を対象に登山人口を育てる努力をどれだけしてきたであろうか。スキー人口の減少を見ても明らかである。シニア料金でゆとりのある層を狙った動きはあるが、子供料金をタダとは言わないが格安にする発想は見られ

ない。目先の利益追求にやっきになっている貧しさが将来を危うくしていると思えてならない。社会全体が登山振興を支える仕組みづくりを日本でもやるべきだと思う。

●グローバルな活動に夢を

神戸大学は、1958年、チリ山岳会と合同で北部パタゴニア氷陸のアレナレス峰3437m(Cerro Arenales)に初登頂した。以来、他国との友好関係構築に寄与してきた。チベットでは1986年、クーラカンリ7554mに初登頂。1988年には中国地質大学(武漢):注-1と合同で四川省、チェルー山(雀児山6168m、Que-er Shan)に初登頂している。

遠征登山は必然的に異国文化との遭遇を伴い、価値観の異なる人々との対峙が発生する。現地の人々との友好を大切にしなければせっかくの初登頂も色あせてしまう。東チベットにはまだ250座を越す未踏の6000m峰が存在し、新時代のパイオニアワークを実践する良きフィールドであるが、多数の峰々がチベット仏教の聖山でもある。現地の人々の心情、価値観を踏みにじるような登山は厳に慎むべきと考えている。温かく迎えられ未永く友人としての関係が続くような登山をしたいものだ。

例に出した中国地質大学との交流は国際化社会で活躍しなければならない次世代にとって有意義な体験であったと思う。「同じ釜の飯を食った仲間」という言い方がある。黒部合宿はそれを実践できた。コミュニケーションやチームワークに問題はあるが、異文化を理解し共通の目標を設定し、達成に向けて困難を克服していくことは何事にも代えがたい体験である。引き続き崗日嘎布山群の未踏峰の合同登山に成功してほしい。また、今一度世界の山々に注目し対象の山を見つけてグローバルに登山を実践してゆくことに夢を持って挑戦する若者たちの登場を期待したい。そして「新時代に相応しいパイオニア精神」が育ち継承されることを願っている。

2008年5月9日 神戸大学山岳会 井上 達男

注-1: 中国地質大学は2校ある。武漢にある学校で総合大学である。温家宝首相の出身校でもある。神戸大学は学術交流および登山交流を20年以上継続している。

注-2: ルオニイ峰は最近の中国の地図では白日嘎峰(Bairiga)6882mとなっている。2007年秋の神戸大学偵察隊の簡易測量では6900m超の結果を得ている。

注-3: 2009年、山脈の第二の高峰Lopchin Feng 6805mが神戸大学隊に初登頂された。